

口述8-4 長期臨床実習中における学生の心理的要因 —積極的に質問するためには—

○藤平 保茂(ふじひら やすしげ), 久利 彩子, 小奈 武陸, 古井 透
大阪河崎リハビリテーション大学 理学療法専攻

Key word : Active learning, 臨床実習, 心理的要因

【目的】近年、効果的な教育手段として、能動的学習(以下、Active learning)がさまざまな教育場面で用いられている。本邦の理学療法士協会においても、臨床実習(以下、実習)で、Active learningの習慣を引き出すことが推奨されている。そのため、臨床指導者(以下、指導者)は、学生がActive learningが出来ているのか、出来ていないのかを判断し、必要な支援を行うことが重要となる。判断する手段の一つに、学生自身の実習に積極的に取り組もうとする姿勢があり、具体的には、実習期間中に学生は指導者に質問しているか、ということが挙げられる。質問ができる学生やそうでない学生の心理的要因が分かれば、学生の効果的なActive learningを支援する一助になる。

本研究の目的は、実習で、積極的に質問ができた学生とそうでなかった学生の心理状況を調査し、学生自身の実習に積極的に取り組もうとする姿勢を支援するために必要な心理状況を検討することである。

【方法】対象は、本学の平成24～26年度に長期の実習に参加した学生200名(男性152名、女性58名)であった。

調査は、記入式アンケートで行った。アンケートに用いた項目は、「積極的に質問することができたか」と、心理状況に関する質問項目として、1)不安感でいっぱいであったか、2)緊張していたか、3)辛かったか、4)楽しかったか、5)やり甲斐があったか、6)指導者に苦手意識があったか、とした。回答は、それぞれ、「あてはまる」から「あてはまらない」までの3件法での回答とした。調査は実習終了後初日登校日に大学内で実施した。

「積極的に質問することができたか」と、1)から6)までの6つの心理状況に関する質問項目について、それぞれ独立性の検定を行った。独立性が棄却された項目について、積極的に質問することができた対象者とそうでない対象者の心理状況を調査した。解析には、エクセル統計Statcel3を用いた。

【説明と同意】本研究は、大阪河崎リハビリテーション大学倫理委員会規則に従うもので(承認番号 OKRU2211)、調査にあたっては、対象者に本研究の主旨を口頭および紙面で説明し、研究参加の同意を得た。

【結果】独立性の検定の結果、独立性が棄却された項目は、1)不安感でいっぱいであったか、3)辛かったか、4)楽し

かったか、5)やり甲斐があったか、の4項目であった。

「積極的に質問することができたか」の問いに対し、「あてはまる」と回答した対象者で、やり甲斐があった、楽しかった、不安感でいっぱいであった、辛かった、と回答したのは、それぞれ、96.2%、84.2%、61.7%、57.1%であった。「積極的に質問することができたか」の問いに対し、「あてはまらない」と回答した対象者で、やり甲斐があった、楽しかった、不安感でいっぱいであった、辛かった、と回答したのは、それぞれ、51.9%、40.7%、96.3%、92.6%であった。

【考察】検定の結果、「積極的に質問することができたか」と関連がなかったものは、2)緊張していたか、6)指導者に苦手意識があったか、の2つの心理状況であった。学生は、緊張や指導者に対する苦手意識によって、指導者に質問することが困難になるのではないかと予測していたが、そうではなかった。患者に対する理学療法の興味は、緊張や指導者に対する苦手意識があっても変わらないことなのかもしれない。

「積極的に質問することができたか」の問いに対し、「あてはまる」と回答した対象者の中で、やり甲斐があった、と回答した割合は、96.2%で、これは、積極的に質問ができた対象者において最も割合の多かった心理状況であった。一方、「積極的に質問することができたか」の問いに対し、「あてはまらない」と回答した対象者で、不安感でいっぱいであった、と回答したのは96.3%で、これは、積極的に質問できなかった対象者において最も割合の多かった心理状況であった。このことから、学生が実習に積極的に取り組もうとする姿勢を支援するものとして、学生の不安や辛さといったネガティブな心理的要因に対する支援が必要であることがわかった。学生自身がこれらの状況にどのような対策や取り組みが必要かについて考え、解決の糸口を探れるように支援をすることが重要と考えられた。このことはまた、指導者には現代の学生のネガティブな心理的要因に対する注意深い配慮が必要であることを意味するものでもあると考えられた。

【理学療法研究としての意義】本研究は、理学療法教育における実習が効果的なActive learningとなるための手がかりを提供できる意義あるものと考えられる。